

グリーン・ツーリズムの振興に関する一考察

— バイエルン州における現状と課題 —

笠木 秀樹（美作女子大学）

I. 目的

自由時間の増大に伴うライフスタイルの変化は、リゾート開発に対しても大きな影響を与えた。バブル崩壊後は環境保護の高まりもあり、各地でリゾート開発の見直しや中止が相次ぎ、1980年代後半のリゾート開発ブームはさまざまな問題点を抱え挫折し、それらへの批判からもグリーン・ツーリズムへの関心が高まってきた。

グリーン・ツーリズムは、もともと西ヨーロッパ諸国ではじまり、今日では多くの人々に余暇活動の一つの形態として受け入れられている。しかし、これは経済的に豊かになった人々の生活価値観が、資源の有限性を認識したことと相まって、自然をコントロールするという発想から、自然への回帰、自然との共生という発想の変化に伴うものであり、それは国際的な課題である環境問題とあわせた国民のライフスタイルの確立と農山村における持続性のある地域開発の手法と大きな関連性を持っているといわれている。

しかし、わが国におけるグリーン・ツーリズムの展開は、外来型開発¹⁾の域をせず、農村への都市施設の導入としてのリゾート開発があとをたたず、必ずしも農村の活性化と結びつく必然性がないことも少なくなかった。²⁾

そこで、本研究ではグリーン・ツーリズムの先進地である西ヨーロッパ、特にドイツのバイエルン州の事例を研究することによりグリーン・ツーリズムの概念の再考とグリーン・ツーリズムによる余暇活動の可能性を明らかにしていきたい。

II. 対象および方法

グリーン・ツーリズムを対象とした著書や研究は、啓蒙書や調査報告書の類を含めると著作も多く、農林水産省をはじめとする行政関係団体の視察や日本地理学会リゾート開発と地域整備研究グループによる研究もすすんでいる。

ヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズムは、イギリスをはじめドイツ、フランス、オーストリアなどで広く普及している。特にドイツでグリーン・ツーリズムが始まったバイエルン州は、地理的にアルプスを擁する比較的農業色の濃い州であり、農業の規模、山地が多いなどわが国と類似している点も多く、比較対照して意味がある地方の一つである。

そこで本研究では、バイエルン州の事例を取り上げ、DLGのガイドブック³⁾をもとに分析を行った。

現地における調査は、平成9年7月24日から31日までの8日間にわたって現地調査（第1図）および現地における経営者や利用者への面接による聞き取り



第1図 バイエルン州における調査地点

タースポーツ、冬は背後の山岳地帯でのスキーと一大レジャーゾーンと化している。

- ① 都市部から近く交通のアクセスがよく、インターチェンジがすぐ近くにある。
- ② 湖があり、ウォータースポーツや日光浴ができる。
- ③ 丘陵地であり夏はバックパッキング、冬はスキー、スケート多くのスポーツ・フィールドがある。
- ④ 自然が豊富で自然を利用したスポーツが年間を通して行われている。

(2) Oberstdorf 地区 (山岳レクリエーション地区)

アルプスの山並みを目前に美しい緑の牧場に囲まれた落ち着いたペンション街が特徴の町。ワールドカップや国際大会が開かれるスポーツのメッカであり、3つのスキー場をはじめ、スケート場やカーリング場などを有し、年間 250 万人の観光客が訪れている。

- ① 交通の便がよい。パークアンドライドシステムにより郊外に駐車場が完備して、電気自動車でも町の中心部を結んでいる。
- ② ワールドカップが開催されたスポーツのメッカであり、多様なプログラムが準備されており、夏は 200km、冬は 150km の山歩きルートが整備されている。
- ③ 大規模開発を規制しすべてが地元資本であり、自然保護に重点がおかれている。
- ④ 100 年の歴史があるにもかかわらず、自然景観や環境、町の美しさがそこなわれていない。
- ⑤ 平均 10 泊する滞在型保養地であり、約 60% がリピーターである。
- ⑥ 「村と呼ばれたい。」という村当局の施策により、環境や地域農業の保全に取り組み、厳しい規制がある。特に、割り石による舗装や道路の湾曲、道幅に変化をつけるなどの整備がゆきとどき、適度な緑木、ポイントに噴水やベンチなどが整備がされ、中高層建築の規制が徹底されている。

(3) Oy-Mittelberg 地区 (小規模レクリエーション地区)

ヨーロッパで有名な避暑地のボーデン湖やスキーのメッカオーバーストドルフが比較的至近距離にあるものの観光地的にはその恩恵を受けていないが、豊かな自然と美しい農村風景がある。

- ① 美しい農村風景が楽しめ、自然が豊富で美しい小さな湖が多数ある。
- ② 農業体験が手軽にできる。
- ③ ウォータースポーツやサイクリング、テニス、乗馬などができる。
- ④ 丘陵地に立地しており、夏はバックパッキング、冬はスキー、スケートとスポーツ・フィールドが豊富にあり自然を利用したスポーツができる。
- ⑤ プールや温泉利用のクアハウスなどが完備している。
- ⑥ 地域の伝統的なイベントが存在しており、ビジターも参加できる。

2, DLGガイドブックによる余暇行動の分類

DLGガイドブックの記載の余暇施設を分類した結果および現地調査によれば、乗馬、自転車、テニス、フィッシング、ウォータースポーツ、ウィンタースポーツを挙げることができる。

余暇行動の特徴としては、農家の近くでの農村の特色を生かした山歩きや野歩きなどの

調査を実施した。

Ⅲ．結果と考察

1. バイエルン州における農家民宿の概要

バイエルン州は、1964年に始まった運動である「農村で休暇を」をはじめ、ドイツの農業政策をリードしてきた。特にドイツ全体の農村セカンドハウス経営農家の約50%が集中し、DLG（ドイツ農業協会）推薦農家1,732戸の33%にあたる565戸が、ガイドブックに登録されている。

(1) 農家民宿の形態

農家民宿の形態としては2つの形態がある。

1つは、*Gastezimmer* と呼ばれる「貸部屋」（以下貸部屋型と称す）であり、ベッドと朝食を用意する形態。かつてはシャワーやトイレは共用だったが、近年は自室に備え付けた形態が主流になってきた。

そして、次が *Ferienwohnung* と呼ばれる「休暇用アパート」（以下アパート型と称す）であり、キッチンやサンタリーを備えた2DK程度で自炊を主とする形態である。

(2) 経営管理

農家民宿の平均稼働日数はDLGの調査によると年間200日前後であり、形態別では貸部屋型が125日、アパート型で168日であり、約60%がリピーターである。年間を通しては、7・8月の夏期と12月のクリスマス前後と1月の冬期に集中しており、10・11月はほとんどビジターがいないのが現状である。

平均滞在日数は、概ね10日前後である。形態別にみると貸部屋型が7.1日、アパート型で10.5日である。平均宿泊料は前者が25DM（約¥1,800）、後者が50～80DM（約約¥4,000～5,500）程度である。

DLGによれば1997年度では、延べ1,350万人が農家民宿を利用し、国内パカンス人口4.6億人の3%にあたるといわれ、収入は平均して農業収入の3分の1を占めている。

(3) 旅行の動機

農家民宿を希望して旅行する人々の動機は次の5点が主なものである。

- ① 静かさの中で何もしていないことができる。
- ② 光のシャワーを浴びることができる。
- ③ おいしい物が食べられること。
- ④ 日常からの脱出できること。
- ⑤ 自然を体験することができる。

特に農家民泊をする特徴的なものを指摘すれば、ゆったりとした時間が過ごすことができる。小動物と戯れることができる。自然体験や農業体験ができる。という3点が挙げられる。

2. 農家民宿の事例

(1) Prien 地区（湖沼レクリエーション地区）

ミュンヘンから80kmと都市部から比較的近く、キーム湖付近に立地し、夏のウォー

ウォーキングやサイクリングが主であり、乗馬、サイクリングなどの野外レクリエーションや自然学習、文化探求など地域の文化とも深く関連したものが多い。夏・冬の2シーズンが中心である。

IV. まとめとして

グリーン・ツーリズムの条件としては、①農村の機能を備えていること。②農村を中心としたレクリエーション活動が基本であること。③農業環境や自然環境の保全が伴うものであることがいえる。

考察の結果、グリーン・ツーリズムの振興は、結果として農山村に与えた影響は大きい。第1に農業外での雇用機会が創出されたこと、第2にすべての活動や政策の前提が環境保全であること、第3としては行政と民間のパートナーシップが確立され、市場原理が尊重された地域自治が確立されていることである。

しかし、ツーリズム人口は、国内バカンス人口の3%にすぎず、いかに農村の魅力を宣伝し、滞在者を増やすかが課題である。しかし、グリーン・ツーリズムの振興によってバイエルン州の農山村の活力がよみがえり、そこから新たな余暇活動が生まれてきたといえる。

参考文献

- 1) 保母武彦(1997)「中山間地域と内発的発展論」、地域開発、97.5 Vol.392、日本地域開発センター
- 2) 井原満明(1996)「グリーンツーリズムの潮流と取り組み」、地域開発 96.3 Vol.378 日本地域開発センター
- 3) DLG(1997) "Urlaub auf dem Bauernhof Landurlaub", DLG-Qualitätszeichen
- 4) 山崎光博ほか(1993)「グリーン・ツーリズム」、家の光協会
- 5) 依光良三ほか(1996)「グリーン・ツーリズムの可能性」、日本経済評論社
- 6) 津端修一(1994)「現代ヨーロッパ農村休暇事情」、はる書房
- 7) 松村和則ほか(1997)「山村の開発と環境保全」、南窓社